

バーゼルにて君の訃報を聞く

吉田城君

スイスのバーゼルという小都市で、君の訃報を聞き、悲しみと怒りとで頭が一杯になっています。「怒り」と書いたのは、君をこの若さで奪ってしまった神様への怒り、もう一つは城君のようなかけがえのない友人との交流を、かくも長い間途絶えさせてきた、自分自身の怠惰への怒りです。

君と初めて出会ったのは、麴町中学の教室でした。当時から語学の才の際立っていた君はクラスメートの中でも抜きん出た秀才でしたが、一方で巧みなイラストを書いて皆を楽しませてくれる人気者でした。君の訃報に際して34R同様、吉田（仁）君、上田君、苔口君といった麴町の友人ともウェブ空間の中で君を偲ぶ言葉を交わしました。

34Rの思い出といえば、やはりあのグループ日誌です。稲葉君が今回のために寄せてくれた写真をみてあの頃の記憶がまざまざと蘇ってきました。漢詩、英詩、イラストと輝くような城君の才能に圧倒されながら、少しでも気の利いたことを書こうと悪戦苦闘し、たまに君から「面白かったよ」と言われて、嬉しい気持ちになったものでした。僕が金融という文学とは縁もゆかりもない野暮な世界にしながら、時々業界紙に駄文を載せたりしているのも、当時の経験が少しは影響しているのかも知れません。

そうそう、鈍行列車で一日近くかけて京都まで旅行したことがありましたね。京都、奈良の名所、旧跡を博識な城君の解説付きで回った、考えてみると随分贅沢な旅行でした。あの時、奈良の街外れの汚い食堂で食べた薄味のうどんのおいしかったこと！

最後に君に会った1977年の暮れ、パリの下宿で出会うなり、「新井（啓右）君が死んじゃったんだよ」と言った時、「え、嘘だよそれ、嘘だよね！」と悲痛な声で叫んだ君の顔が今でも臉に焼き付いています。新井君の急死に際して、「神々の愛でし者は夭折す」という言葉（これを教えてくれたのは、確か橋本昇二君 [34Rクラスメート、現東京高裁判事] でした）を思い浮かべたものでした。今再びその言葉を思い出すと共に、「え、嘘だよ！」と自分自身が叫ぶ

ことになろうとは・・・

高橋さんが紹介してくれたお弟子さん達のサイトを拝見しました。フェルメールが好きだったんですね。僕もフェルメールを求めてヨーロッパの美術館を渡り歩きました。ハーグで、ブルーストが絶賛した「デルフトの眺望」を呆然と眺めた後、電車でデルフトに行き、あの石畳の街を彷徨いました。そんな話をいつかできるかと思っていたのに叶わぬ夢となりました。君と一緒にフランス語の授業をとったのに結局ものになりませんでした。今度東京に帰った時、ご夫妻の書かれた入門書を買って再度「五十の手習い」に挑戦してみようかと思っています。いつか天国でお会いする時に備えて。

Je ne vous dis pas adieu. Au revoir, Joe!

2005年7月15日

吉國眞一 Shinichi YOSHIKUNI